慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 地域通貨を契機としたまちづくりの可能性と限界についての調査研究 |
| Sub Title | |
| Author | 山田, 賢司(Yamada, Kenji) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2007 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.64 (2007. ) ,p.189- 191 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 平成18年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000064-0189 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 地域通貨を契機としたまちづくりの可能性と限界についての調査研究

山　田　賢　司

## はじめに

本研究の目的は，地域通貨とそれを取り巻く地域社会を対象に，地域内のさまざまな行為者の，地域通貨ならびにこれに関連する諸活動に対する意識や行為を調査することを通して，地域通貨を契機としたまちづくりの可能性と限界を明らかにすることである。

上記の目的を踏まえたうえで，本報告では次の三つを課題とする。第一に，まちづくりの手段として地域通貨を位置づけることにする。第二に，筆者が2003年4月から2005年11月にかけて調査を行った，千葉の地域通貨「ピーナッツ」とそれを取り巻く地域社会（西千葉地区＝千葉市中央区松波＋稲毛区弥生町）の事例を元に，地域通貨を契機としたまちづくりの困難性ないしは限界について触れることにする。そして第三に，同じ事例を別の視点からみることで，地域通貨を契機にしたまちづくりの可能性について検討する。

## まちづくりの手段としての地域通貨

地域通貨の特質や意義については，すでにさまざまな経済学者・経済人類学者によって考察がなされているが，その代表的な論者の論考（西部，2002；丸山，2004；森野，2004）を整理すると，地域通貨は，地域の中に「互恵的交換のネットワーク」を形成する媒体だということになる（山田，2006）。なお「互恵的交換のネットワーク」とは，①一般的な貨幣を媒介にした交換のような，売り手と買い手の間の人格を伴わない（第一次接触のない）交換ではなく，他者に対して何らかの貢献をしようとする「売り手（提供者）」と，そうした提供者を信頼する「買い手（受益者）」との間で行われる人格を伴った相互扶助的な交換としての「互恵的交換」，②地域通貨によって，「互恵的交換」が特定の二者間だけでなく，より大勢の人たちのネットワークの中で行われる「交換のネットワーク」，そして③「互恵的交換」と「交換のネットワーク」が形成されることにより，ヒト，モノ，カネ，情報などの資源がこの中を循環するという「資源の循環」の三つの要素を含む概念のことである。地域通貨の代表的な論者は，地域通貨を導入しさえすれば，「互恵的交換のネットワーク」が形成されると受け取ることのできる考察を展開しているのである。

しかし現実の地域通貨は，参加者が集まらずに活動休止や廃止に追い込まれている例も少なくない。また，現在稼働中の地域通貨においても，参加者が一定以上は集まらずに苦戦している例も多く，「ピーナッツ」もその例外ではない。こうした点を踏まえると，地域通貨は，あくまでも「まちづくりのための一つの手段」と捉えたほうがよいように思われる。なお，ここで言うところの「まちづくり」とは，地域の行為者（個々人および組織）間の第一次接触を促し，それを基盤に，必要なときに互いに協力し合うことのできる関係性を構築することである。そして地域通貨は，こうした意味での「まちづくり」を行うにあたって，普段は接することのない地域の人たちを一堂に会することができるようにするための「話題づくり・きっかけづくり」として作用するのである。つまり地域通貨は，「話題づくり・きっかけづくり」という点で，あくまでも「手段」なのであり，地域通貨そのものが「まちづくり」を促すとい

うわけではないのである。

では次に，地域通貨「ピーナッツ」の事例から，地域通貨を契機としたまちづくりの困難性（限界）および可能性について解明および検討していくことにする。

**地域通貨「ピーナッツ」の概要**

地域通貨「ピーナッツ」は，2000 年 4 月より，千葉市中央区松波にある「ゆりの木商店会」の店舗にて導入が始められた地域通貨である。この商店会は，1998 年にできたテナント店舗中心の新興の商店会である。現在，「ゆりの木商店会」でこの地域通貨のメンバーになっている店舗は，35 軒中 25 軒ほどである。地域通貨「ピーナッツ」の全メンバー数は，2005 年末の時点で約 1100 人であり，数字の上では日本でもっとも規模の大きい地域通貨の集まりの一つであることが言える。地域通貨「ピーナッツ」は基本的に，「通帳方式」と呼ばれる地域通貨であり，この地域通貨を使って取引を行う際には，「大福帳」と呼ばれる通帳に，取引の日にち，取引の相手，取引された「ピーナッツ（ピー）」の額を記入することになっている。「ピー」とは，貨幣でいうところの円，ドル，ユーロなどに当たる，地域通貨「ピーナッツ」の単位であり，1 ピー＝1 円，1 時間の手伝い＝1000 ピーが，おおよその価値付けの基準になっている。つまり，「ピーナッツ」のメンバーが 1 時間，他のメンバーの手伝いをした際には，相手から 1000 ピーをもらうことができるということである。また，お店で地域通貨を使用する場合には，その店の商品の定価（円）のうち，5% から 10% の額を，ピーで支払うことができるようにしている店舗が多い。なお，地域通貨「ピーナッツ」に関連する実践的な活動は事実上，西千葉地区の商店主が中心になって開設したアソシエーション「ピーナッツクラブ西千葉」が担っており，実質的なリーダーは，「ゆりの木商店会」の初代会長で美容師の，K. M. 氏である。

**地域通貨を契機としたまちづくりの困難性（限界）**

地域通貨「ピーナッツ」が西千葉地区において置かれている状況として，まず，部分的ではあるものの，「互恵的交換のネットワーク」が成立しているということがあげられる。このネットワークには，「ピーナッツクラブ西千葉」に属する一部商店主と，「ピーナッツ」のシステム管理を行っている「ピーナッツクラブ事務局」の成員（2 人），そして，稲毛区弥生町にある千葉大学の一部関係者（学生，教職員，卒業生）が参加しており，活発な相互行為が繰り広げられている。

しかし一方で，「ピーナッツ」を媒介に形成された「互恵的交換のネットワーク」は規模が小さく，参加者の属性に著しい偏りがある（つまり，前述の人たち以外の参加が活発でない）ことも明らかになった。例えば，地元の地域住民組織（町内会および古くからある商店連合会）とは疎遠ないしは対立的な関係にあり，また，「ゆりの木商店会」でも「ピーナッツ」の活動に積極的にかかわっている店主は僅かであることがあげられる。加えて，西千葉地区の（大学関係者を除く）一般住民の「ピーナッツ」絡みの活動への参加もほとんど見られなかった。

以上のことを踏まえるならば，地域通貨は，参加者の数を増やし，地域内のさまざまな立場の行為者をその活動に参加するよう促すことで「まちづくり」に繋げていくという点においては，困難性ないしは限界があるといわざるを得ない。

**地域通貨を契機としたまちづくりの可能性**

前述のとおり，「ピーナッツクラブ西千葉」の商店主と，「ピーナッツクラブ事務局」の成員，そして千葉大学関係者との間で活発な相互行為が繰り広げられている。例えば前出のK. M. 氏が，自身で始めた通所介護施設の2階スペースを，千葉大学の大学院生（設立当時）が設立したNPO「T」の事務所として月5万ピーで貸し出す代わりに，「T」のメンバーが，「ピーナッツクラブ西千葉」主催でほぼ月1回行っているフリーマーケット「第三土曜市」に模擬店を出店して場の盛り上げに一役買っていることがあげられる。また，学生サークルの美術系同好会（仮称）は，「第三土曜市」の際に似顔絵のブースを出店したり，2005年に「ピーナッツクラブ」のマークを製作したりしている。そして，「リ・サイクル」という任意の学生団体は，千葉大学構内などに放置されている自転車を再利用できるようにする活動を「ピーナッツ」を活用して行っており，また2005年秋には，「ピーナッツクラブ西千葉」と協同で「西千葉まちづくり協議会」を開催したりしている。

こうした「ピーナッツクラブ～」と大学関係者の関係からは，前者の活動に後者が参加し，その活動に後者が何らかの「楽しさ」を見いだすことによって継続的な相互行為が促されていることがいえる。そしておそらくは，こうした継続的な相互行為によって，当事者のあいだでは，一種の「われわれ意識」が生じていることが考えられる。確かに地域通貨「ピーナッツ」の活動は，地域内の広い範囲でのまちづくりを促すという点では限界があるのかも知れない。しかし，地域通貨を媒介にしたまちづくりを目指す活動が，それまで互いに接点のなかった行為者同士の継続的な相互行為を促し，われわれ意識の醸成にもつながる「出会い」の場として機能するという点では，（たとえ参加者が限られていたとしても）可能性をもった活動であることがいえる。したがってこうした活動は，居住者同士の第一次接触を多少なりとも衰退させ，彼らを機能集団における機械的な役割に埋没させるといわれる都市社会において，そのような負の影響を緩和させる機能を発揮する可能性が十分にあるのではないかと思われる。

## 主要参考文献

丸山真人，2004，「資本に転化しない『貨幣』：地域通貨」丸山真人・内田隆三編『〈資本〉から人間の経済へ』新世社：166-184.

森野栄一，2004，「自立経済と甦る貨幣改革論の視点」丸山真人・内田隆三編『〈資本〉から人間の経済へ』新世社：145-165.

村山和彦・塚田幸三，2001，『地域通貨の可能性―ピーナッツ実践報告―』千葉まちづくりサポートセンター.

西部忠，2002，『地域通貨を知ろう』岩波書店（岩波ブックレット No. 576）.

山田賢司，2006，まちづくりの手段としての地域通貨―千葉の地域通貨『ピーナッツ』の事例をもとに―」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第62号.